

タイの象物語

タイの象物語

環境・国際研究会誌 2001年5月
タイ在住 川口 泰広(タクライ)

私は、最近ゾウに魅せられた者です。タイでは、ゾウの話題が新聞のトップを飾ることも少なくありません。その中から、目にとまった記事などをお伝えします。

再び、タイ国境、ビルマ側において、象が地雷を踏んで負傷

持ち主であるターク県のターウォーンさんという人が、象使いのディゲーさんを雇って、年齢29才のモーヘーという名前のメス象に、2年前から国境地帯のビルマ側で材木の運搬の仕事をさせていた。その当時から妊娠しており、去年の2月末に子象を出産した。オスの子象(まだ名前がない)は1才になるが、その後もビルマ側でモーヘーを働かせていた。

2月1日の朝、いつものように餌を食べさせるため作業場の近くで親子の象を放していた。象使いが爆発音を聞きつけ見に行ってみると、モーヘーの前左足から血が流れていたが、子象の方は大丈夫だった。すぐに、ビルマ側から国境であるムーイ川を3時間かけて渡り、タイ側に戻って来た。その後、象の友財団に連絡が入り、モタラの持ち主だったソムワンさんがトラックで迎えに行き、2日の夜中にランパーン県の象病院に到着する。

モーヘーは、爆発で左前足の爪が2枚はがれて、肉が粉々になっていた。子象は、地雷の破片を少し受けたくらいで別状はなかった。傷はモタラのように深くはなかったが、傷口が汚れていたため、消毒とあわせて抗生物質を与えた。治療を担当した獣医によると、傷口を洗っているときに涙を流していた。今後は、麻酔をかけて、粉々に砕けた細胞を切り取る手術をする予定だが、モタラのケースのようにバイ菌が入り化膿しないよう、細心の注意を払って治療にあたっている。

象の友財団の事務局長ソーライダーさんは次のようなコメントを出した。「モタラの事故が起きてからも、同じようにタイの象がビルマ側で仕事をしていて地雷で負傷するケースが後を絶たず、今回の事故で10頭目になる。タイの政府や関係機関は、同じような惨事が起こらないような対策を立てるべきである。現在タイ国内には3,000頭の象がいると言われているが、現在はランパーンに保護センターが1ヶ所あるだけで、決して十分だとは言えない。仕事のない象が危険な目に遭わずに生きていけるよう、それらの象を受け入れるためのセンターを設けるべ

きだ。」

4日の朝8時半に子象が死亡する。原因は、長い距離の移動による疲労と病院に着いた当初から下痢をしていたことではないか。象病院に着いてからは、母象に抗生物質等の薬を投与するので、その影響を考え、母乳を飲ませないようにして、豆乳等の補助食を与えていた。しかし、スタッフが見ていないところで母乳を飲んだ可能性もある。子象は、下痢が止まらず、最終的には血便を出し死亡した。象の友財団の事務局長のソーライダーさんもそのショックで気絶してしまい、ランパーン県内の病院に運ばれた。子象の死体は、死因究明のために解剖され、病原菌の感染を防ぐためにその日のうちに火葬された。スタッフの話によると、モーヘーは子象の死体を前に、鳴き声を上げ、両目から涙を流して悲しんでいた。

子象を亡くしてから、モーヘーは泣き叫んで悲しんでいる。傷口は消毒はしているが、いつどのような手術をするかはまだ決まっていない。象の友財団の専従の医師が、アジア象のセミナーでバンコクに行っており、現場で指揮を執って手当をする獣医がいない。傷口を消毒すると、大きな声をあげて痛がる。〈2001 / 02 / 6〉



地雷を踏んで負傷した象の写真

ゾウ病院（ゾウの友・財団運営）

その後、モーヘーの続報は、新聞でもテレビでも取り上げられていません。多分、手術をする日が決まったら、またニュースに登場するでしょう。モーヘーがゾウ病院に到着した日、あそこのゾウ病院には顧問の獣医が居合わせなかったようです。バンコクで、何かセミナーか研修があって、そちらの方に参加していて、消毒などの応急手当は、ゾウ使いやスタッフがやっ

たと思われます。モタラのテレビ番組にも出ていたプリチャー医師は、ゾウの移動クリニックのプロジェクトにも関わっているし、本来はタイのゾウ保護センターの職員だと記憶しています。保護センターの方にもゾウ病院があり、両者の関係がうまくいっているのかなという印象を持っています。

すっかりNHKの番組で有名になったモタラですが、2月4日にゾウ病院に行ったとき撮ってきた写真を添付します。原則的には、撮影場所から先には、一般の人は入れないことになっており、タイ語と英語でこの先立入禁止の看板が立っています。伝染病の感染を警戒しての処置のようですが、私はすぐ近くまで行って来ました。ただ、スタッフに写真の件を聞くと、許可をもらって欲しいようなことを言われたので、今回は遠慮して遠くからのショットです。

地雷で傷ついた傷口の方は、かなりよくなってきているようですが、まだ完全にふさがっていないので、義足はまだいつになるかわからないと言っていました。あの番組にでていたゾウ使いの人はもう辞めて、今はもっと若い人が担当しています。エサも食べ、健康だけれども、毎日傷口の消毒はしているそうです。屋根の下にいることが多いのか、全体的に皮膚の色が白っぽくなり、額の辺りは、色が抜けたような感じになっています。

ゾウの結婚式 ~ アユタヤ ~

バレンタインデーにゾウの結婚式

この2月14日に“アユタヤ・パーク筑商業センター”でゾウの結婚式が行われる。今回の結婚式は、アユタヤ・エレファントキャンプの2頭のメス象と1頭のオス象、そしてチョンブリー県のパタヤ・エレファントキャンプからオス象が1頭やって来て行われる。2頭のメス象は、まだ出産したことがない。今回の式は、人間の場合と同じように、仲人をたて、行列を行い、結納金も9,999Bが用意されている。(タイでは9は縁起の良い数字)仲人には、アユタヤ市長や観光協会の会長が予定されている。衣装のデザインも終わり、縫製をしており、オス象、メス象それぞれに衣装を付ける。アユタヤ・エレファント・キャンプのオス象は、繁殖用の種つけゾウで、今までに20頭ぐらいと交尾を行っている。アユタヤ・エレファントキャ



ンプのオーナーで今回の仕掛け人でもあるソムパート氏は、「ゾウと人との関わりは昔から続いており、出稼ぎに行っていた象も一ヶ所に集めることで、キャンプ内での繁殖も可能になってくる。」と話している。ただ、アユタヤ・エレファントキャンプには、繁殖用の種つけゾウが1頭しかおらず、今回の他のキャンプからオス象を迎えることになった。もう1頭のオス象は、パタヤ・エレファントキャンプからやって来るが、結婚式といっても、交尾がすめば、またパタヤへ戻って行く。“ブアバーン筑という名のオス象は、ターク県（モタラヤモーヘーがいた県）で生まれ、ラヨン県で育ったが、オーナーのトンスック氏が4年前に買った。パタヤにいる間も9頭とペアリングをし、4頭が成功している。そのうちの1頭は10回近い交尾の末に成功している。成功の是非は、オス象の繁殖力の強さやメス象の年齢などに関係している。去年は2頭生まれて、今年は12頭生まれる予定である。アユタヤ・エレファントキャンプで2頭、カンチャナブリのサファリパークで1頭、残りの9頭はスリン県内である。以前日本の動物園からも連絡があったが、渡航上の問題があり、この話は実現していない。それ以外にも、コマーシャルや映画出演もしている。このゾウのオーナーは、いつかタイのゾウの繁殖センターを作りたいと考えている。

<川口談>

アユタヤのゾウ・キャンプは、話題作りが上手く、マスコミを上手に利用している。アユタヤという観光地を生かし、ゾウを使っての事業に成功していると言える。ホームページは、<http://www.saveelephant.com> で、英語の記事もあるが、更新は去年の10月とちょっと古い。

市民に愛された双子のゾウの一頭が亡くなる

チョンブリー県にあるカオキアオ・オープンZOOにいた双子のゾウ“チュムとチム”の姉ゾウであるチュムが3月16日の夕方に亡くなった。16日の朝方、体調の異変に気づいたゾウ使いが、動物園内の獣医に連絡し、抗生物質を注射したり、点滴（生理食塩水）を与えたが、必死の手当の甲斐もなく、同日の夕方に亡くなった。症状は、激しい嘔吐と5分おきぐらいの排尿で、獣医が駆けつけたときも、近くに人を寄せ付けず、治療をするのに時間がかかってしまった。

動かなくなったチュムを前にして、ゾウ使いは声をあげて泣き悲しんだ。チュムが倒れたとき、妹ゾウのチムが鼻を使って何度もチュムの身体を起こそうとした。動かなくなった姉ゾウの横で、妹ゾウのチムは泣き叫び、涙が流れ落ち、餌も食べないほど悲しんでいた。死体は死因の検証のため、内臓の一部が摘出され、その後動物園内に土葬された。動物園では、体が大きすぎて剥製にすることはできなかったが、近日中に供養祭を催すよう話し合いが進められて

いる。

“チュム - チム”の双子のゾウが生まれたのは、1993年8月27日で、姉ゾウが午前6時に、妹ゾウは15分後の6時15分に生まれた。母ゾウは、カンチャナブリ県の「戦場に架ける橋」の近くで観光客を乗せていた。双子のゾウもその近くで生まれた。双子で生まれてくる場合、雄ゾウと雌ゾウの組み合わせが普通だが、“チュム - チム”の場合は、2頭とも雌ゾウで、世界でも珍しい。タイ国内では、200年前にスリン県の家ゾウ（野生ではない）で双子があったが、記録によると雄ゾウと雌ゾウだった。その後、ある私企業が100万バーツを寄付し、ゾウの親子とゾウの持ち主の家族は、1994年3月7日からカオキアオ・オープンZOOで暮らすことになった。持ち主は、動物園で雇われて、この2頭の象の世話をしていた。“チュム - チム”は動物園でも人気者で、この動物園のマークになったり、タイ観光年のPR用ロゴとして使われたこともある。

治療と解剖に立ち会った獣医の話によると、ゾウの様子が異常で、その日はゾウ使いさえも側に近づけず、特に大腸は異常に腫れていたという。現在、死因を検査中だが、何か毒物が体内に入った可能性が高いと推測されている。

チュムの死がマスコミで報じられてから、残され悲しんでいるチュムを励まそうと動物園には普段より多くの市民が訪れている。ただ一部の市民の間からは、動物園側がチュムの死を隠そうとしたのではないのか、慌てて土葬した点にも疑問の声が寄せられている。また、チュムが亡くなる前には、動物園内で管理職と一般職員の間で軋轢があり、それが原因で、誰かがエサに毒を混ぜて食べさせたのではないとも言われている。いずれにせよ、世界に一組の双子の雌ゾウの一頭が亡くなってしまったことは、タイにとっても、動物園にとっても、かけがえのないものを失ったことには間違いない。

双子のゾウの一頭が亡くなる ～その後～

検査の結果、伝染病などの病原菌は見つからなかった。一部で毒を盛られたと言われているが、化学物質も今のところ検出されていない。ただ、大きな動物を殺せるぐらいの毒性がありながら、解けてしまっただけに残らない毒物もある。詳しい検査の結果が出るには、まだ数日かかる予定。

動物園側は、亡くなったチュムの仏式による供養祭を行い、ゾウ好きな市民も献花に訪れた。動物園の園長は、内部抗争について否定しているが、動物園関係者の話からすると内部では、かなりもめていたようである。

短 信 あれこれ

アユタヤのゾウ・トレーニングセンターでは、この学期休みを利用して、希望する近所の子どもたちにゾウ使いの訓練をしている。

マスコミによく登場するのは、アユタヤのゾウ・トレーニングセンターと今回結婚式のあったランパーン県のゾウ保護センターである。

地雷を踏んで足を怪我したモーヘーは、現在もゾウ病院で治療を続けている様子。ただ、テレビや新聞では一切報道されていない。

